モリエールの性格喜劇における理性 - 主人公の狂気をめぐる他の人物の動きの考察

久保田　麻里

19 世紀の批評家 F・ブリュンチエールが、モリエールは作品中のある特定の類型の登場人物を通じて自身の思想を表明していると確信し、狂気の主人公に対してそれらの人物を「理屈家」と呼んで以来、この存在は 20 世紀の初頭まで圧倒的な存在感を放っていた。しかし、モリエールの演劇人としての側面と作品の喜劇性を重視する傾向が徐々に強まり、この劇作家を思想家と捉える姿勢の象徴ともいえる「理屈家」という存在は、ついには 20 世紀の半ばに R・ブレにより作劇法の綿密な分析をもって完全に否定されるに至る。とはいえ問題は解決するどころかますます多くの論考を生み、誕生から実に一世紀以上が経過した今もこの存在は不安定なままである。これには「理屈家」という存在に対する過剰な信頼と必要以上の拒絶という対照的な二つの問題が影響している。「理屈家」は、一方で劇の中心である狂気の主人公にも勝る重要な存在として扱われながら、他方で生来与えられている倫理性への反感によりいかなる倫理的意図をも否定されているのである。そこで今回の研究発表では、これまでの「理屈家」研究の手法を踏襲しながらも視野狭窄に陥らないために次の方針を採った。まず、観察対象を劇の中心となる狂気と関わりを持つ全ての登場人物にまで広げること。次に、それぞれの登場人物の言葉と行動の両方から、狂気との関わり方を観察すること。最後に、それぞれの登場人物の動きの意味を、他の登場人物との関連や作品全体の展開との関係において考察すること。以上の三点に留意しつつ性格喜劇 10 作品（1660 年『スガナレル、あるいはコキュにされたと思った男』、1661 年『亭主学校』、1662 年『女房学校』、1665 年『石像の宴』、1666 年『人間嫌い』、1664-9 年『タルチュフ、あるいはペテン師』、1668 年『守銭奴』、1670 年『町人貴族』、1672 年『女学者』、1673 年『病は気から』）を発表順に検討することで明らかになったのは互いに絡み合う二つの変化である。まず一つ目は作品の構成にある。主人公の狂気に立ち向かう登場人物の人数を増やすだけでなく、自然な人物造形を与えることで劇世界に違和感なく根付かせ、様々な立場に置かれているそれぞれの人物の意図や動きの関連性を強めながら方向性を統一するなかで、最終的には狂気の主人公と周囲の人物の境目までも取り払っている点で、徐々に全体的な統合に向かっている。続く二つ目は作品の倫理的意図にある。初めは遠目に皮肉をこめて主人公を観察していた周囲の人物は、身近にいる傍迷惑な人間としてうんざりしながら接触を持ち、なんとかしろと責め立てながら呆れつつも尻拭いをし、救ってあげたいと手を伸ばすまでになり、最後には出来得る限り主人公をありのままに受け入れ満足させており、嘲笑を生む懲悪から軽やかに弾ける笑いに満ちた赦しへの転換が起こっている。作品の内部構造が多様性や広がりを得ながらも諸要素の均整を備えるように洗練されていくにつれて、作品の倫理的意味もまた、単純な善悪の二項対立から複数の視点の導入による揺らぎを経て、全てを包み込む一つの調和へと収斂していくことを確認した。

フーコーにおける主体性とセクシュアリティの問題

柴田秀樹

『性の歴史』の第一巻である『知への意思』以降、晩年のフーコーの主たる関心はセクシュアリティの問題を起点として「主体性」の問題に取り組むことであった。こうした主体性の概念の展開は、現象学とラカン派精神分析という、フーコーの知的形成に大きな影響を与えた思想体系における議論からの差異化として捉えうる。まず現象学については、セクシュアリティの問題が、性的関係における「愛撫」という身体的接触の現象を通じて思考されている点が重要である。デリダはそのナンシー論のなかで、こうした現象学の議論を批判している。彼によれば現象学を含む西洋の形而上学においては「触れること」による他者認識というモチーフが支配的であり、そこでは「他者」はつねに触れる主体による我有化の危険に晒されているのである。フーコーの『知への意思』の結論部においては、「身体と快楽」こそが権力への抵抗の拠点であるとされているが、以降のフーコーのセクシュアリティをめぐる議論は、他者の我有化につながらない性的関係のあり方を追求している点でこうしたデリダの批判と通底しているといえよう。

続いてラカンの精神分析だが、ラカン的な主体とは現象学の場合とは全く異なり、その自明性を奪われ脱中心化された主体である。この脱中心化は「言語」の主体にたいする優越によって説明される。『監獄の誕生』から『知への意思』に至る時期に、フーコーは権力による主体の「主体化＝隷属化」を主張したが、そこにはラカンとの類似を看取することができる。しかしフーコーは、ラカンのように男女は主体としての構築のされ方が異なるため、両性の間に「性的関係は存在しない」と主張することはない。このような両者の差は、「パレーシア」をめぐる晩年の講義でのフーコーの議論に注目することを通じて明らかにしうる。パレーシアとは「真理を言うこと」であり、その真理を言うにふさわしい存在として自らを主体化し、他者をまたその真理の受け手にふさわしい存在として主体化する双方向の働きを持っている。このパレーシアにおいては、言語を仲介とした自他の共存関係が可能となっているのである。

ここまで、現象学と精神分析というセクシュアリティと主体性の問題に対する二通りのアプローチについて検討してきた。それによれば現象学は「身体」、精神分析は「言語」を軸に性的関係における主体と他者の問題と取り組んでいるのであるが、フーコーはこうした二つの思考のモデルからいかに距離を置き、独自の主体の概念を練り上げるに至ったのだろうか。それは１９８０年以降の講義において「身体」と「言語」の問題がいかに扱われているかに注目することを通じて明らかにしうる。そして最晩年のフーコーのキュニコス主義に対する注目は、彼がそこでは「身体を通じたパレーシア」という、身体と言語の問題を統一した主体化の実践が行われており、セクシュアリティを包み隠さず表明することがこの実践には不可欠であると考えていたことから説明されると結論できるだろう。

「１９世紀末文学とカフェ Le Chat Noir におけるフュミストリー」

岡本　夢子

１９世紀末文学において文学新聞の担った役割は大きい。1880 年代に発行された新聞雑誌は、多くが短命のうちに終わったが、新たな文学を目指して流派を形成し、既存の芸術に挑戦した。ただし旧世代への反発は、文学新聞が乱立する以前に、カフェが発行した新聞の中にも見られた。1881 年の暮れから 1897 年までパリ、モンマルトルで営業したカフェ Le Chat Noir は「現代的であれ！」の標語のもと、同名の週刊誌の発行やカフェでの朗読の催しによって、前衛的な芸術に作品発表の場を提供したのであった。作家たちが自発的に集まって文学活動をしたことから後天的に文学カフェと呼ばれたものは Le Chat Noir 以前にも見られるが、オーナーのロドルフ・サリスは開店当初から芸術家たちの作品発表を見世物にすることを企画しており、計画的に作られた初の文学カフェであった。

週刊誌 *Le Chat Noir* は他の新聞と違い、定まった運営方針がなかったことが特筆できる。初代編集長エミール・グドーは既に閉鎖的になっていた文学サロンの代わりに、全ての参加者を受け入れる芸術の中立地帯を Le Chat Noir に作ろうとしたのである。新聞とカフェへの作品発表を通して、文学流派形成以前の詩人たちはそれぞれのアイデンティティを確立し、芸術理念を精製した。象徴主義やデカダンなどの運動は文学カフェでの活動から生まれたと言えるだろう。

反順応主義といわれる既存芸術への反発に加え、自由な意見交換が許された Le Chat Noir ではフュミストリーと呼ばれたユーモアの形での芸術批判が生まれた。後世数多く生まれる文学新聞とは違い、カフェ新聞は文芸人以外の大衆やブルジョワ階級にも購読され、このユーモアは Le Chat Noir の人気とともに 1880 年代の流行語として親しまれた。

イドロパット紙に載せられたジョルジュ・フラジェロールによるフュミストリーの美学解説によれば、エスプリが多くの人が集まる場で対象者に自分が愚か者だと思い知らせることであるのに対し、対象に同意し物事の真髄を示させながらその意見の馬鹿さ加減も露呈させることがフュミストリーの性質である。つまりある美学に従って模倣することでその文学流派の本質的な滑稽さを暴くテクニックであると考え、*Le Chat Noir* 紙に掲載された三つのフュミストリー作品を分析し、19 世紀末文学をフュミストたちはどう観察していたかを検討した。

アルフォンス・アレのコント« Les Deux Hydropathes »からはユイスマンスの『さかしま』との共通意識を通して反自然主義、観察の文学に対する懐疑心を読み取った。同じくアレの詩« Poème Morne »は過度に悲観主義をアピールするデカダン詩人たちが、現実には作品ほど絶望していない様を示しているとした。ピエール・ミルのコント« Poèmes Modernes »では単音節の詩が万国共通の至高の詩作品として扱われており、究極の詩を求める同時代の詩人たちの姿勢対する冷笑と考えた。いずれも文学の動向に敏感な読者のみが面白みを理解出来るもので、読者に客観的な視点を維持させている。

フュミストリーはパロディの性質を持っていることから対象になる同時代の芸術と深い関わりがあり、作家研究とは異なる１９世紀末文学へのアプローチを許す一つの文学活動である。またフュミストリーを含む Le Chat Noir の文学活動は大衆との関わりから俗物的であるとして軽視される傾向にある。しかし、Le Chat Noir は大衆の文学受容や前衛芸術への意識変化を追う上で２０世紀芸術につながる重要な要素であると考え、世紀末文学との関わりを捉えた。